

# 一 橋 大 学 哲 学 会 報

一 橋 大 学 哲 学 ・ 社 会 思 想 学 会 会 報 N o . 3 2  
(「研究会便り」より通算第60号)

発行者 一橋大学哲学・社会思想学会

発行所 一橋大学哲学・社会思想学会

連絡先tel./fax 042-580-8644

〒186-8601 国立市 中2-1 一橋大学社会思想共同研究室内

Email:1tetsu2019@googlegroups.com

URL : [http://www.soc.hitu.ac.jp/~soc\\_thought/conference.htm](http://www.soc.hitu.ac.jp/~soc_thought/conference.htm)

## 第 27 回一橋大学哲学・社会思想学会

【日 時】 2020年12月5日(土) 13:30～ オンライン開催

\* 会員の皆様には、別途、メールにてZoomのアドレスをお知らせします。

【タイム・テーブル】

13:30～ 第14回総会

14:00～17:00 個人研究発表

14:00～15:30 空間主義宣言：断片その2

遠藤 進平（本学社会学研究科）

司会 井頭 昌彦（一橋大学教授）

15:30～17:00 伝統とアーレント—「真珠採り」は何を企てるのか

青木 崇（本学社会学研究科）

司会 久保 哲司（一橋大学教授）

## 目次

第27回大会案内	1
第27回大会の発表要旨	
遠藤進平	2
青木 崇	3
総会議案	4
加藤泰史「私の一橋時代」	6
大河内泰樹「転出のご挨拶と一哲学会の思い出」	7

## 個人研究発表要旨

### 空間主義宣言：断片その2

遠藤 進平（社会学研究科博士後期課程）

この発表では、様相空間主義 modal spatialismと名づけられる形而上学的立場を提案し、擁護する。

可能性や必然性に代表される様相の概念を、（可能）世界をつかって説明しようというプロジェクトは現代の様相理解の標準的なプログラムといってさしつかえないだろう[1]。その、様相を説明するために導入された世界がなになのか——その存在論地位は抽象者なのか具体者なのか——についてはながらく形而上学者のあいだで論争になってきた。

そこで本発表は、世界を空間の資源だけをつかって理解しよう、とうちだす。これが空間主義者の「空間」主義たるゆえんだが、より具体的には、様相空間主義者は次の二つのテーゼを主張する。まず第一に、あらゆる世界はどこかに存在する（場所テーゼ）。第二に、いかなる世界も次元構造をもつ（次元テーゼ）。これらの系として、次元構造をもつ環—世界空間の存在をあわせて主張する。とどのつまり、世界とは、部屋の片隅を本棚が占めているというのと大差ない、環—世界空間の一部を占めるものだとして理解される。

様相空間主義は、David Lewisの名のもとで知られる様相实在論[3]の改良版である。Lewisのそれは可能世界を時空的に接続するものたちの極大として理解するのであった。じじつ、様相空間主義はその動機や軸となる論法をLewisのそれらから継承している。可能世界はさまざまな理論化に有用であるからその存在を認めるべきだ（Quine式存在論的コミットメントの応用）。また、存在を認めるとしても抽象者ではなく具体者として扱ったほうが形而上学的資源の節約になるし、また、還元の推進としてふさわしい。これらはどれも空間主義がひきつづき採用する観点である。

しかしながら、Lewis流様相实在論への批判は枚挙に暇がない。空間主義はそれらの問題を超克するための、ある種の改造といえる。が、強調しておきたいのは、この改造はけっしてLewisの流儀の妥協や弱体化ではなく、むしろ先端化であるということである。

本発表の構成は次のかたちをとる。まず、様相の形而上学の発展を通観し、空間主義をいちづける。とくに、先行するLewisとの差分に着目する。彼が反実仮想文の意味論を提案[2]するときにじつは希求していたものの、とちゅうで放棄したプロジェクトとして空間主義をいちづける。その放棄の理由はたいして正当化されていないことを示し、Lewisの二の足を論難する。つづいて、Lewisに向けられた批判を「三つの層」に整理し（これは、様相の形而上学業界における本発表のなすささやかな貢献のひとつでもある）、それぞれに応えられることを示す。総花的になるのを避け、本発表ではとくに「認識論的反論」として知られる反論（なぜ別の可能世界のことをわれわれが知れるのか？）とその反論に注力したい。

参考文献：

[1] Divers, John. Possible Worlds. Routledge, 2002.

[2] Lewis, David K. Counterfactuals. Basil Blackwell, 1973.

[3] Lewis, David. On the Plurality of Worlds. Oxford: Blackwell, 1986.

個人研究発表要旨

## 伝統とアーレント —「真珠採り」は何を企てるのか—

青木 崇（社会学研究科博士後期課程）

80年代から90年代にかけて、西洋哲学の伝統に対するアーレントの独特な態度がその思索に深く浸透するものとして注目され、またそのような態度からアーレントが読み直されるようになった。こうした動きは、『カント政治哲学講義』（政治的判断論）の公刊、ハイデガーとの関係の露呈、フェミニズムからの再評価、そのモダニティとポストモダニティをめぐる議論によって触発され、それらと連動していたが、アーレントのギリシア偏愛——それはともすればポリスの復興を主張しているようにさえ見える——に対する数々の厳しい非難への応答として大きく捉えられうる。そこでは次のような問いが立てられたと理解できるだろう。すなわち、その政治理論が単なるギリシア偏愛の近代批判でないとするれば、アーレントは西洋哲学の伝統といかに対峙したのか。

本稿の目的もこの問いを引き継ぎ、それに答えることであるが、以上のようなアーレント解釈の方向性は、いわゆるモダン／ポストモダン論争の沈静化のためか、その後の研究ではほとんど引き継がれてこなかった。しかし、伝統に対するアーレントの態度そのものは、問うべき主題であり続けているはずである。

アーレントが伝統に対する自らの態度についてまとまった仕方で論じるのはまずもって『過去と未来の間』であり、次に『暗い時代の人々』に収められたベンヤミン論である。アーレントの伝統論としてはとりわけ前者が参照すべき文献である。それによれば、キルケゴール、マルクス、ニーチェにとっては未だ転倒させつつそこから跳躍するための土台でありえた伝統は、今や権威もなく眼を惹くこともない廃墟と化している。一方で、後者においてアーレントは自らの態度を、「真珠採り(pearl-diver)」のそれとして表しつつ、ハイデガーの「解体」とベンヤミンの「歴史の天使」の間に位置づける。ただし、その位置づけに関するアーレントの記述は必ずしも明細なもの

ではないため、その細かな輪郭を描き直すことは解釈者の課題である。この点の先行研究としては、デイナ・ヴィラによる『アレントとハイデガー：政治的なものの運命』（1996）やシェイラ・ベンハビブによる“The Reluctant Modernism of Hannah Arendt”（1996=2003）などが参考になる。以上のような見通しのもと、本発表では、伝統に対するアレントの態度が、むしろ伝統の上に立つ現在に対するものであり、また、廃墟と化した伝統を「解体」し現在を揺るがしつつも、伝統に埋もれたままの過去の断片を蒐集することで新たに思考するものであることをその現代的な意義とともに明らかにする。

一橋大学哲学・社会思想学会

## 第14回総会議案書

（1）2019年度の活動報告（前回総会以降）＊敬称略

① 研究大会および総会の開催

第25回大会（通算55回）2019年6月1日（土）、職員集会所大広間

参加者 31名（学内15名、他大学その他16名）

13：00—13：30 総会

議長 杉本 隆司

【個人研究発表】（一橋大学国内交流セミナーを兼ねる）

13：40—15：10 岸 俊輔（東京大学）

司会 井頭 昌彦

「メタ哲学的主張としての概念工学—科学との距離について—」

【講演】

15：20—17：20 井頭 昌彦（一橋大学）

司会 干場 薫

「形而上学の実在論タイプの物理主義を論難する」

17：30—19：30 研究懇話会（職員集会所 食堂）

第26回大会（通算56回）2019年12月7日（土）、佐野書院小会議室

参加者 12名（学内11名、他大学1名）

【個人研究発表】

14：00—15：30 高橋 駿仁（一橋大学）

司会 森村 敏己

「啓蒙黎明期の歴史研究—ニコラ・フレレの歴史擁護と宗教批判」

15：40—16：40 高木 駿（一橋大学）

司会 井頭 昌彦

「カントと公的空間—趣味判断の多元主義の観点から」

17：00～ 懇親会

② 学会発表者の募集（前回総会以降、3回）

1、2019年冬大会の募集・・・5月15日付（応募期間6月17日～7月15日）

応募者2名・・・査読の結果、採用される。

2、2020年夏大会の募集・・・11月27日付（応募期間1月15日～2月11日）

応募者1名・・・入会手続きを経て、査読の結果、採用される。

3、2020年大会の募集（夏大会延期に伴う追加募集 9月28日～10月11日）

応募者1名・・・査読の結果、採用される。

③ 「一哲学会報」の発行

【第31号】（2019年12月4日発行）

掲載記事・・・第26回冬大会案内／個人研究発表要旨／個人研究発表募集のご案内

【第32号】（2020年12月4日発行）

第27回大会案内・第14回総会案内／個人研究発表要旨／総会議案書／加藤先生原稿／大河内先生原稿

④ 総会・幹事会

第13回総会 2019年6月1日（土） 議長 杉本 隆

第1回幹事会 2019年9月25日（水） 社会思想共同研究室

第2回幹事会 2020年3月5日（木） 社会思想共同研究室

第3回幹事会 2020年4月3日（金）～ メール審議

第4回幹事会 2020年10月14日（水） オンライン開催

⑤ 渉外関係・・・特になし。

⑥ 学会ホームページ

HPの更新・管理を特任助手が業務の一つとして行った。『一哲学会報』は、図書館の機関リポジトリ（Hermes-IR）に登録されている。

（2）今後の活動方針について

## 休会の提案

2020年3月5日に開催された一橋大学哲学・社会思想学会幹事会において以下のような方針案が策定された。については2020年12月5日に開催予定の総会において、代表幹事より提案し、承認を求める予定である。

大学を取り巻く情勢が厳しいことは言うまでもないが、本学においても哲学および社会思想を担当する教員は2020年度よりそれぞれ一名ずつとなった。定年退職もしくは他大学への移籍により教員数が減少する一方で、予算の継続的削減に伴う人事計画の見直しにより後任人事が進まないことが原因であるが、こうした状況が改善される時期については明確な見通しが立っていない。また、現在、当学会の運営事務の大部分を担当している共同研究室特任助手も2020年度末をもって退職するが、その後は共同研究室助手というポストそのものが廃止され、従来のような形での助手の雇用は行われなことが決定している。

専任教員の減少とそれに伴う哲学・思想史専攻の大学院生の減少、担当助手の退職、共同研究室制度の廃止といった状況に鑑み、幹事会で議論を重ねた結果、従来のように年に二回、定期的に学会を開催することは困難だと判断するに至った。そのため、教員の増員等の体制が整うまで学会としての活動は当面休止することにしたい。

ただし、大学院生にとっての研究発表の場を残すため、また他大学から研究者を招聘する等の活動を継続するために、今後はセミナーという形を取ることにしたい。定期開催ではなく、報告の希望が寄せられた場合や、興味深い企画が提案された際に、セミナーを開催することとする。学会のホームページは残し、セミナー開催が決まればホームページ上で告知したうえで、メールでも通知する。なお、経費と労力の節約のため、今後は封書による連絡は廃止することにする。

一橋哲学・社会思想学会代表幹事 森村 敏己

## —私の一橋時代—

加藤 泰史（椋山女学園大学教授）

美しいキャンパスであることはすでに知っていたが、私が初めて一橋大学に足を踏み入れたのは2002年の日本倫理学会の大会の折であった。中央東線を松本から特急に乗ってきたので、信州大学で中部哲学会が開催された後で東上したのかもしれない。国立の駅舎はまだあの三角駅舎であった。薄暗い古色蒼然とした駅内から一歩外に歩き出した時の眩しさを何となく記憶している。倫理学会の休憩時間に古い由緒ある建物を探検してみた。今から考えると、図書館や本部棟の建物だったのではないかと思う。時代を感じ、時代の雰囲気を感じてみた。左右田喜一郎はどこに研究室を構えていたのかとも思った。懇親会は佐野書院ではなかったか。古茂田茂さんが開催校を代表して挨拶をされた。その際に辛酉事件にも言及して夏目漱石の東京高商批判にも言及された。乾杯の発声の後で私を見つけて声を掛けてくださった。「加藤さん、漱石の作品は『彼岸過迄』で正しかったですか」と聞かれたので、「いいえ、『それから』ですよ」と答えて、二人で思わず顔を見合わせて高笑した。その古茂田さんの後任になるとはこの時夢にも思わなかった。父親が倒れた直後であったので迷った末に相談したら、立松弘孝先生が背中を強く押してくださった。それが無かったら一橋には異動しなかったであろう。

立松先生が野家啓一さんと始められたフッサールの読書会やミュンヘン大学でのシェーンリッヒ先生のオーバーゼミナールに参加した経験からゼミ生には厳しく望もうと決めた。時代は褒めて伸ばすことが称賛されていたので、おそらく苦々しく感じていたゼミ生もいたであろう。しかし、例えば日本哲学会に投稿して採択されたり、学振に応募して特別研究員に採用されたりするためにはゼミでの厳しい議論が不可欠だと思っていたし、今でもそれは変わらない。幸いなことに柳橋晃君や上野大樹君などのように東大や慶大から院生がもぐりで参加してくれたことに加えて『哲學』に掲載されたり学振に採用されたり、さらに津田菜里君のように日本哲学会で受賞するゼミ生も続いた。ただし、阿部謹也先生のいう「世間」にはなり得なかった。最後の一年は空中分解であった。

国立の在職期間中は斎藤慶典さんに頼まれて慶大にも教えに出かけた。慶大には他に納富信留さん（途中で東大に転出された）、エアトルさん、拓殖尚則さん、山内志郎さんといった親しい友人たちもいたので、三田のキャンパスで会って話をするのも楽しみであった。ある時斎藤さんから四～五年かけてカント哲学全体を詳しく講義してほしいと要請されて前批判期から『オプス・ポストウム』までを講義した。三年間受講してくれた大変よくできる学生さんがいた。質問は鋭く急所をついたものが多かった。結局彼女の卒論指導も手伝うことになったが、とても優れたカント哲学の卒論を書き上げた。一橋の大学院に来ないかと密かに期待したが、医学部に進学してしまった。少しだけ心残りである。慶大は高木駿君に引き継いでもらった。高木君の論文も今年『哲學』に掲載された。

東北大学での集中講義も思い出の一つである。山形や盛岡から友人たちも駆けつけてくれて東北大学の先生方と連日朝まで飲んだ後で一日講義するのは体力的にはしんどかったが、充実した一週間であった。野家さんからは最終日は午前中で終わるようにと厳命されたが、院生諸氏からせがまれて結局夕方まで講義した。最後に彼らからお土産を手渡されたのには驚いたが、正直とても嬉しかった。これまで集中講義を何度か行ってきたが初めての体験である。

実はサントリーホールにも日参した。学生時代に聴いたカラヤン/ベルリン・フィルのブラームス1番の深く静かな感動以来の名演に出逢うこともできた。ティーレマン/ウィーン・フィルのブルックナー8番（ハース版）である。ただし、アンコールは余分だった。今年中国社会科学院に就職した魏偉君にもよく会った。大概私よりも高い席に座っていた。今でもzoomで顔を合わせている。とても元気だ。王燕敏君にも中山大学の日中哲学フォーラムで会えた。着実に研究の幅を広げており、両君ともに母国での今後の活躍が期待される。

日本学術会議の問題も地方の私大に異動してみると遠い話である。教員間では話題にもならない。

今回の問題を私自身は「学問の自由」の深刻な侵害であり、任命拒否の「理由」を開示させた上で撤回させるのが筋だと解釈している。岩波文庫の『世界憲法集』を紐解くと「学問の自由」が必ずしも各国憲法の標準装備であるわけではないことがよく分かる。それゆえに、日本国憲法第23条の「学問の自由は、これを保障する」という十数文字を理解するにはその歴史的背景、例えば「天皇機関説事件」や「滝川事件」などに思いを巡らす必要があるのではないだろうか。この「学問の自由」は何よりもカントやフィヒテの強調した「学問の自律性」を原理的に含意する。学術会議問題の焦点はこの自律的基盤が掘り崩される点にある。今回の手法はナチス・ドイツが反抗的なベルリン大学を支配下に置こうとする手口に似ている。それが正鵠を射ているとすれば、次はスキャンダルの流布であろう。友人の小島毅さんの話ではそれはすでに始まっているという。今回の問題に関して私が滑り坂論法の立場に立つ所以でもある。

哲学は「理由」を問う知的営為のはずだから、拒否の「理由」を問い続ける責任があろう。哲学は殿軍を担う運命にある。先日も若尾政希先生が史学委員会委員長として挨拶をされていたが、少し前まで中野聡学長や町村敬志先生も中心的な役割を担っておられて一橋にいと学術会議は身近な存在である。それはある意味で特権的でもあるが、同時にそうだからこそ責任も重いことを意味するのではないかと思う。かつて安川一先生が研究科長時代に研究科改組に関連づけて人文・社会科学の危機にどう根本的に対応すべきかに関して教員間で問題意識を共有するためにいくつかの企画を立てられたが、参加者の数は低調であった。ワインを私費で10数本近く用意された安川先生に同情を禁じ得なかった。新しい職場の同僚の中にも人文学・社会科学の危機に関して優れた知見を持つ教員は多いが、私学ではどうしても学生確保の観点からの検討に偏りがちである。忘れていた南山時代の感覚が呼び覚まされた瞬間でもあった。純粋に学問的見地から検討できること自体が私学の立場からすればもう特権なのである。これを行使しようとすらしなければ、胡座をかいて大学の社会的基盤を自ら掘り崩していると非難されても仕方がないのではないだろうか。新しい職場には一橋の出身者や一橋で非常勤をした経験のある教員が何人もいるので少なからぬ人が一橋からの発信に期待している。ただし、データサイエンス学部などは論外である。一橋にカタカナ学部は似合わない。

私の一橋時代は10年にも満たない短い期間であったが、かけがえのない時間であった。招聘してこのような機会を与えてくださった平子友長先生をはじめとする現旧の社会文化の先生方には感謝の言葉もない。また、旧ゼミ生を引き取ってくださった森村敏己先生や久保哲司先生、井頭昌彦先生にも改めて感謝申し上げたい。共同研究室の干場薫特任助手にもお世話になったお礼を述べておこう。最後に旧ゼミ生を含む一哲会の若手諸氏にはさらなる学問的飛躍を祈念したい。私自身はと問われれば、新しい同僚に、『1980アイコ十六歳』で作家デビューされた堀田あけみ先生がおられるので、介護問題が一段落したら、学生たちに交じって小説の作法を学んだ上で『国立(くにたち)物語』でもものしたいと思っている。

## —転出のご挨拶と一哲学会の思い出—

大河内泰樹（京都大学文学研究科教授）

私は2019年10月に、9年間お世話になった一橋大学社会学研究科を離れて、京都大学文学研究科に異動いたしました。一哲学会には学生時代（≡研究会時代）からあわせて24年ほどお世話になってきたこととなります。会員のみなさまには、ご報告が遅れて申し訳ありません。

多くの会員のみなさまにとってはいまさらかもしれませんが、少し一哲学会の歴史を繙いてみますと、私が院生として一橋に来た頃は、研究会を名乗っていました。発足は私が入学するより前のことですが、普段なかなか接点のないゼミ間の交流のためにはじめられたと聞いています。HPに研究会時代の報告者と報告タイトルが上がっていますが、哲学・社会思想にとどま

らず社会学なども含めて、今一線で活躍されている名だたる方々が報告されていたということがわかります。私自身学生時代は、正直いうとなんとなしに参加していたのですが、いまさらながらとても貴重な場所であったことが分かります。（なんとなくといっても、もちろん研究会で交わされる先生方先輩方の議論にはとても刺激を受けていました！）

院生の業績が求められる傾向が強まったことから、2007年に学会化しましたが、一哲学会という素敵な略称はたしか新川さんが提案されたものだったかと記憶しています。私は留学中だったと思いますが、メール上の議論を拝見していた記憶があります。時期は学会化より少し後だったかと思いますが、それまで会員の研究報告だけだったのが、シンポジウムなども開催してより学会としての形を取るようになってきたのも学生さんの主導によるものでした。

学会になってから、メンバーもまた移り変わりましたが、現在に至るまで多くの有意義な企画が行われています。私は一橋に着任してすぐにヘーゲルのコルポラツィオン論について報告させていただいたのですが、このフランス語由来の概念について大変有意義な示唆を森村先生はじめみなさまからいただいたのを思っています。またここ数年は、井頭先生が主導しての分析哲学系の企画で、多くの学外からのお客さんたちも集めるようになってきており、一哲学会の活動も広がりを見せています。

この10年ほどの間に岩佐先生、島崎先生、山崎先生、平子先生が退官され、また古茂田先生が亡くなられるという悲しい出来事もあり、教員メンバーも大きく入れ替わりました。その中、森村先生と並んで研究会時代からの一哲学会を知る者として、おこがましくもいつてしまえば、今後の役割を期待されていたかと思うのですが、それも果たせず申し訳ないと思っています。最近では加藤先生も退職され、教員メンバーは森村先生と井頭先生のお二人となり、ご負担も大きくなっているかと思えます。また教員だけでなく、学生のみなさんに運営を依存する割合もこの間増えてきていました。

しかしさらに誰よりも、この一哲学会の最大の貢献をしてくださったのは助手の干場さんではないかと思えます。院生時代から教員時代までずっと、干場さんにはお世話になってきました。その干場さんも、今年度でご退職とうかがいました。まだ少し先ですし、またそれまでにご挨拶する機会もあるかと思えますが、この場を借りて学生として教員として長年お世話になったことについてお礼申し上げたいと思えます。

大学と人文・社会科学に向けられている世間の視線は、特にここ最近暖かいものとはいえません。その多くは先入観や思い込み、あるいはデマにさえももとづくものですが、まさにそうした時代であるからこそ、哲学・思想から現代社会についてちゃんと地に足の着いた研究を積み重ねていくことの重要性はむしろ高まっていると感じています。文学部に異動してきて、いちばん感じるのは一橋の哲学・社会思想には、常に社会的問題関心が生きていたということです。その意味で、一橋の哲学・社会思想はいまこそ必要ですし、私は文学部という場所ですこしでもそうした社会と哲学を架橋する一橋の精神を継承する研究と教育ができればと思っています。

職場が一橋から離れてしまったとはいえ、私も卒業生として引きつづき会員ですので、みなさんにお会いできる機会もあろうかと思えます。この会報も今回で残念ながら最後とのことですが、コロナ禍も収まりまた一橋のキャンパスでみなさんとお会いできること、そして議論できることを楽しみにしています。最後にあらためて、この一哲学会を長年応援していただいたことについて、かつての教員メンバーのひとりとしてお礼申し上げます。そしてまたこれからも応援をよろしくお願いいたします。